



板谷峠(755)は福島県境ではなく、米沢市板谷から見て県境の反対側にある。1855(安政2)年秋に清河八郎と母親らの一行が板谷峠を越えた時には、笠が飛ばされそうになるなど風雨で苦労したようだ。八郎の旅日記「西遊草」(東洋文庫)に「(休息所である)旅人助けの家が2軒あり、五色といふ温泉場も見えた」とある。この峠は分水界で、東は福島に流れ、西は羽黒川から最上川となる。八郎は、初めは小さな流れが郷里の清川(庄内町)では大河となり、洋々と海に入るとして「孔子がおおせられたように、河の流れのように倦(う)まず弛(ゆる)

清河八郎 「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査後半同行記

2

板谷峠—大沢—米沢

かやぶき、宿場の面影



米沢市大沢を散策し、晩秋の山村風景を楽しむ踏査メンバー

る)まず勤めてやまないなら成功するだろう」と書いた。板谷峠を越えた八郎親子は、大沢宿の茶店でキノコなどを煮させて昼食を取った。「西遊草」の県内ルートを検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」(矢口正武代表)戸沢村出身)の踏査メンバーは、板谷から同市大沢に向かう県道を進んだ。峠を過ぎると、道沿いの川は確かに板谷付近とは逆方向に流れている。変化に富んだ溪流の景色や近隣の山々の紅葉を満喫した。

1980(昭和55)年度の「県歴史の道調査報告書 米沢・板谷街道」によると、大沢宿は江戸時代の最盛期に六十数軒あり、本陣、脇本陣を擁した。1980(昭和55)年度の「県歴史の道調査報告書 米沢・板谷街道」によると、大沢宿は江戸時代の最盛期に六十数軒あり、本陣、脇本陣を擁した。1980(昭和55)年度の「県歴史の道調査報告書 米沢・板谷街道」によると、大沢宿は江戸時代の最盛期に六十数軒あり、本陣、脇本陣を擁した。

「海に遠く山の中の狭い土地だと思っていたが、意外な平地で大そう広い」「城下から赤湯(南陽市)までは藩邸の上を歩くようだ」とも。ルートは違うものの、23年後の1878(明治11)年に新潟県境の十三峠から本県に入った英国人旅行家イザベラ・バードが、置賜盆地を「アジアのアルカディア(桃源郷)」と称賛したことが思い浮かぶような表現だ。

一方、八郎は米沢城下の町家が「寮外みすぼらしい」と指摘したが、豪雪のため重い瓦屋根がなく、かやぶき屋根の家が並んでいたことが、そうした印象を与えたとの見方もある。

清河八郎らの一行は米沢城下を出発して赤湯温泉に泊まり、マツタケを注文して酒を飲んだ。踏査メンバーは米沢藩領内の街道の基点となった米沢市大町の「札の辻(つじ)」跡を確認し、市中心部から赤湯を経て上山市へと北上した。(文=鶴岡支社・伊藤哲哉、写真=同・色摩高幸)

山形新聞
2012年11月25日
に掲載!